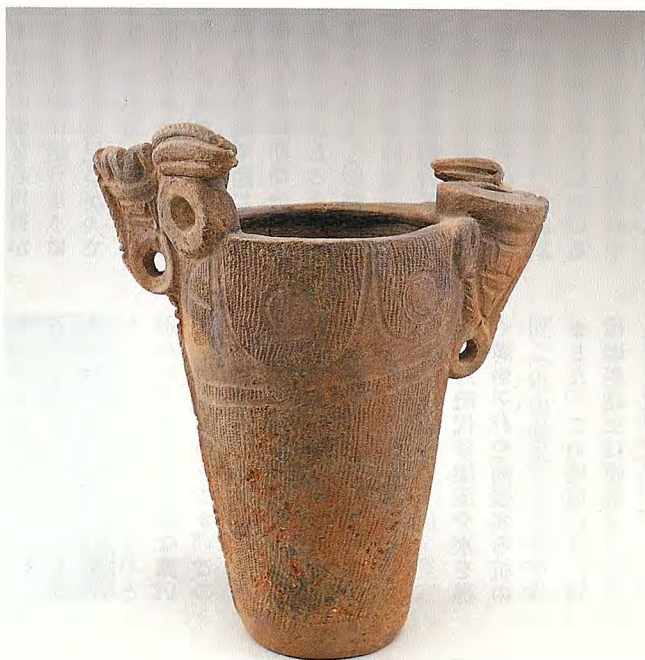


たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.23 平成3年9月30日

双蛇把手付深鉢土器



(縄文時代中期：勝坂式)

高33.9cm 口径18.0cm

八王子市大塚

多摩ニュータウン

No.67遺跡

多摩の四半世紀

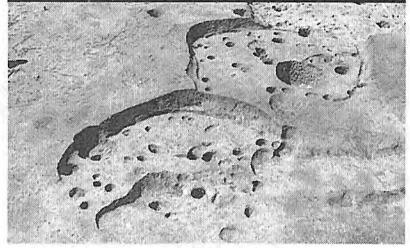
これほどまでに変貌するとは考えもよばなかった昭和40年代の多摩ニュータウンの発掘調査である。川の流れば大きく蛇行を繰り返し、多くの生物をその懐のなかに抱え込んでいた。道は、人の往来を十分に確保することができれば十分で、人家や田や畑などの間を結んでうねっていた。山はクスギ・コナラを中心とした雑木林で、人々との生活の関連をうかがわせるように、下草や落葉の始末がされた美しい林であった。

土器などが散布し、採集されたところが遺跡として登録され、調査された。人家に近い畑地等を発掘した。現地近くまでバスで行き、それから徒歩30分ぐらいいは、当たり前、休息所はブルーシートを樹木の間で張る。焚火の上には、真っ黒に煤けたヤカン、雨の日と年末・年始は現場は中止、もちろん土・日も現場で調査、作業終了時間はバスの時刻にあわせる、そういえばトイレはなかった。

山は削られ、川はまっすぐに流れ、スポーツカーやバイクが団地の中を走り回る。電気・電話・ガス・冷蔵庫等は当たり前。調査環境の近代化は、調査内容の充実につながり、つくりだす成果を出していると、いいきりたい。

(佐藤 攻)

遺跡だより②7



縄文時代住居跡 (諸磯期)

遺跡は町田市小山町にあり、多摩丘陵のほぼ南西端を流れる境川支流の谷戸奥に位置し、湧水点近くの尾根筋より一段下がった南緩斜面に立地しています。

調査は昨年12月から今年8月下旬まで行い旧石器時代、縄文時代早期・前期、古墳時代、江戸時代から近代までの村や生業の跡が発見されました。

縄文時代は早期後葉(茅山下層式1軒)・前期中葉(黒浜式4軒)、後葉(諸磯式2軒)の竪穴住居跡が各時期にほぼ集中して発見されています。墓塚3基・炉穴9基・焼土11基・陥し穴

26基が規則的ともみられるように検出されました。

古墳時代前期初頭(五領期:4世紀初頭)の集落跡が発見されました。ムラは竪穴住居跡や柱穴群によって構成されています。住居跡は大きさの異なる14軒が斜面の等高線に沿うように3段に分かれて見つかっています。これは一時期に全部の住居があったのではないようで、大きな住居を中心に一時期数軒で建て替えをしながら何時期に分けてムラを作っていたことが住居の重複から窺えます。

住居からは土師器(壺・甕・鉢・高杯・器台・碗・ミニチュア)や石製品(砥石・石皿)・鉄製品の残片が出土しています。土師器の中には赤く塗られているものもあります。お祭りや儀式に使われることもあり、ここでは日常の道具として使われていたようです。また、焼けた土の中から炭化した桃の核(タネ)が発見されていますが、コ

メは残念ながら発見されていません。

隣接し次頁に紹介されていますNo.924遺跡とNo.196遺跡の住居跡や墓跡からは装飾品としてのガラス製の小玉・管玉、鉄製の槍鉋等が見つかっていますが、集落のあり方や遺物の出土に見られる特長は今後興味深い事実をもたらしてくれるものと思われ、ますますさらに興味深いことが一つあります。このムラは境川から直接に望むことができな所、山奥といってもよい所にあり、どうしてこのような場所にムラを作ったのかはわかりません。

江戸時代は炭窯や水を導く溝やそれを補強する杭の列(水田施設?)がありました。この地域は江戸時代の冬期には炭焼きで生計を立てていたようです(新編武蔵風土記稿に書かれています)。今後、発掘された資料の整理・分析を進めるとより様々な事がわかると思います。(小坂井孝修)



住居跡遺物出土状態 (壺・甕・貯蔵穴)

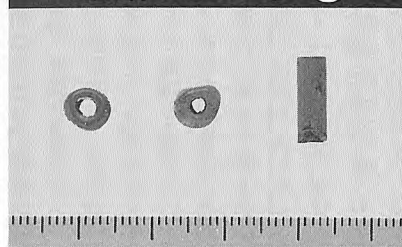


住居跡遺物出土状況 (甕・高杯)



古墳時代住居跡群検出状態

遺跡だより ②8



ガラス玉と管玉

今回は町田市小山町に所在するNo.924遺跡について紹介します。

遺跡は境川上流域の通称「相原・小山」地区にあり、谷に面した丘陵先端の緩斜面上に位置しています。遺跡は現在も調査中ですが、古墳時代前期の竪穴住居跡45軒、墓と思われる土塚6基、縄文時代の住居跡1軒などが検出されています。今回はこの古墳時代前期のムラについて少しお話しします。

住居跡45軒は調査区域の急な斜面を除くと、ほぼ満遍なく検出されています。中には住居跡どうしが重複

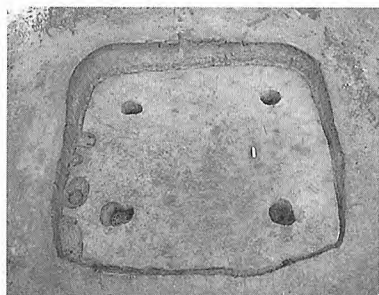
しているもの、4、5軒がほぼ等間隔に並ぶものなど、平面的な分布だけをとっても、興味深いものがあります。これから出土した土器などを検討していくことによって、一時期に何軒の住居跡が機能していたのかが分かってくると思われます。

当遺跡の住居跡から出土する土器は「五領式土器」と呼ばれる古墳時代初頭の土師器です。この土器は埼玉県東松山市大字柏崎字五領で発見されたことから、その地名をとって命名されたものです。実年代は、4世紀頃、今からおおよそ一六〇〇年前と考えられます。

さて、一六〇〇年前のここに居住していたムラの人々の生活は、いったいどんなものだったのでしょうか。当時は弥生時代に始まった水田稲作農耕もかなり本格的なものとなり、農具も木製だったものが、鉄製の刃先なども普及しはじめ、土木・灌漑技術も少なからず進歩し、収穫量はかなり増

大したものと思われる。また水田の他にも粟・稗・麦・豆などの畑作物が収穫されていたものと思われる。当遺跡のすぐ下にある谷も、谷間の水田として人々が使用していたことと思われます。

このムラの人々はどういう家に住んでいたのでしょうか。住居は地面を掘り込んで床・壁を作り出す竪穴式住居でした。竪穴の形は上から見ると、隅が少し丸い方形をしています。大きな家で7×8m、小さな家で3×3mを測ります。竪穴の深さは深いもので1mを超え、浅いものでは20



1号住居跡全景

cm以下とかなり異なっていました。これが住居の建てられた時期の違いであるのか、住居の構造の違いであるのかは、これからの検討が必要です。竪穴の床面からは、炉・貯蔵穴・周溝・柱穴などの施設が検出されています。炉は地床炉と呼ばれる、床面を少し掘り込んで火を使用しただけのもの

ので、中にはかすかに土が焼けた痕跡を残すだけのものもあります。貯蔵穴は現在の床下収納庫のようなものと考えられ、中からは多量の土器が出土しています。周溝・柱穴は、住居跡によって検出されるものと検

出されないものがあります。傾向として、大型の住居跡には4本のしっかりとした柱穴と明確な周溝が検出されます。

住居の中から出土した遺物は、壺・台付甕・高杯・器台・小型壺などの土師器と鉄鍔・槍鉋（鉋）などの鉄製品などです。高杯・器台には赤彩の施されたもの



1号住居跡遺物出土状態

もあり、祭祀的な要素を感じさせます。また東海地方から搬入されたと思われる「S字状口縁」をもつ甕や「三重口縁」をもつ壺なども僅かに出土しています。写真は当遺跡で一番大きな1号住居跡の全景と遺物の出土状態、そしてこの住居から出土した管玉とガラス小玉です。管玉とガラス小玉は組み合わされて、首飾りとして使用されていたものと思われる。

当遺跡は、現在調査中であるため、また新たなる発見もあるかもしれません。今後に期待して下さい。

(金持健司)

遺跡だより ②9



遺物の出土状態

今回は、尾張藩上屋敷跡遺跡を紹介します。

尾張名古屋藩徳川家の江戸上屋敷は、現在の新宿区市ヶ谷本村町に所在し、その大半が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地の敷地となっています。この地は、武蔵野台地の東部にあたり、標高31mの地点に位置します。

尾張徳川家は、徳川御三家の筆頭で、石高61万9千5百石の領国を治めていました。その上屋敷は、当初江戸城内（現在の吹上御所の辺り）にありましたが、明暦2（一六五六）年に市ヶ谷の地を幕府より拝領（約6万7百坪）し、その

後明和4（一七六七）年には屋敷地を西側へ大幅に拡張しました。明治4（一八七二）年、廃藩置県によって明治政府の所有となった頃には、8万3千8百32坪（27万6千6百㎡）という広大な面積を占めていました。明治以後は、陸軍士官学校、陸軍参謀本部などを経て、現在に至っています。

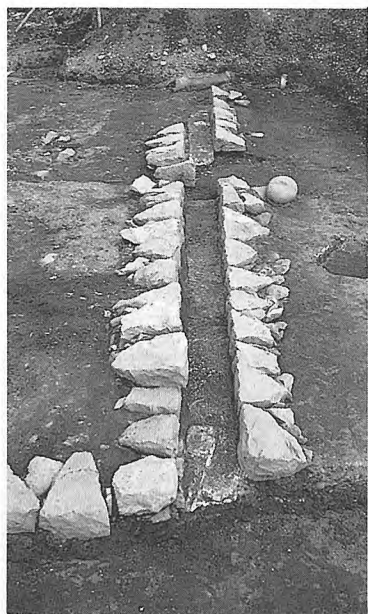
4月下旬より開始した調査地点は、調査面積約1万㎡、屋敷地内の北東側の区域にあたります。名古屋市蓬左文庫所蔵の「市ヶ谷御屋敷之図」一丈政8（一八二五）年作成に照らしてみると御主殿の奥向に相当する部分と考えられます。

江戸時代の遺構は、明治以後に建造された陸軍士官学校の建物などにより壊されている部分も多いのですが、建物の柱の基礎となる礎石やその痕跡、排水に使用されたと考えられる石組の溝、井戸、造り付けのかまど（へっつい）、日常生活で不用なもの（特に壊れ

た器や食物のかす）を棄れたゴミ穴、火災や地震で壊れた瓦を棄てた瓦溜、その他土坑などを確認しています。特に石組の溝は、平面長方形に加工した切り石を底石に、ほぼ四角錐に加工したものを側石に用いて構築しています。この遺構は、礎石とともに建物の配置を考える上で重要な鍵を与えてくれます。また、ゴミ穴からは鳥・魚の骨や貝殻などが出土し、当時の食生活の一端を示してくれます。

出土遺物には瓦・ワインボトル・キセル・古銭など多種ありますが、種類・量ともに多いのは陶磁器類です。その多くは碗・皿・徳利などの日用品ですが、三葉葵の描かれた皿の小片も出土しています。

今後調査の進展に伴い、江戸時代の大名家藩邸の構造やその暮らしぶりなど、これら残されたモノが語ってくれる事柄は少なくないでしょう。（石崎俊哉）



石組溝



調査区全景

国際第四紀学会

に参加して

大黄河、延々と続く段丘と段々畑、煉瓦造りの家並、城壁。とにかく広く、大きい。そして人も多い。中国。

私は、七月下旬から八月中旬にかけて、国際第四紀学会に参加するため、海外研修として中国に行きました。その前半は北京でのシンポジウムと周口店遺跡見学でしたが、後半、巡検旅行として北京から西安まで黄河中流域、黄土地帯の旧石器時代の遺跡を見学する機会に恵まれました。

見学した遺跡は山西省と陝西省の丁村、大荔、藍田遺跡の三つで、丁村が約七万から一万年前で、他の二つは一万年以前です。どの遺跡でも、黄河が運ぶ土が風によって堆積した黄土の露頭の中から発掘されました。日本ですと、こうした時代の遺跡からはほと

んど石器しか発見されませんが、中国の遺跡では人骨や動物の骨も発掘され、むしろ遺跡から得られる成果は、考古学より人類学や古動物学の分野で進んでいます。

遺跡とは直接関係ないのですが、そこに生活する人々と土地、大地との関わりと言いましようか、そういう点で興味深い風景を目にしました。丁村の村で見た風景は印象的です。畑の横に高さ三米ほどの土の柱があるのです。これは土をかためて造ったものではありません。まわりの土地を三米も削ってしまったのです。村人たちの長い歴史の中で、家の建築に使う煉瓦を作るために大地を削り取ったのです。そういえば、道々至るところで煉瓦窯と燃料に使う乾草の山を見かけました。土地の使い方もっと印象的なのは、段丘に延々と続く段々畑でしょう。段々畑は、日本ですと段の高さは一米にも達しないのが普

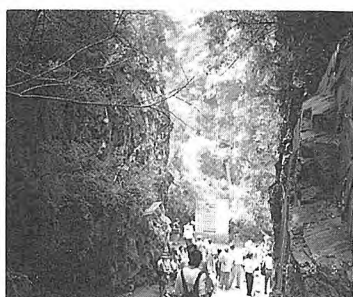
通ですが、ここでは段差が数米にも達するのです。それもよほど急でもない限りあらゆる斜面は段々畑にしてしまします。これは、飢饉の時でもどの面かの畑では作物が収穫できるという、飢えとの戦いを繰り返してきた中国人の知恵なのです。それにしても、森と言えるほどのものがなく、畑や黄色い土を剥き出しにしている休耕畑が限りなく続く景観は、日本人にとっては異様なものです。

それもこれも、日本と比べて苛酷な自然の中でくらす中国の人々の生活の知恵なのでしょう。そして、そうした人々に支えられた中国のなりわいは、現在では食糧難という心配もないので、充分成功しているといえるでしょう。

北京や西安、臨汾、大荔の街々でお世話になった人々に感謝の気持ちを含めて、

謝謝！

(伊藤 健)



周口店遺跡



丁村遺跡



大荔遺跡



丁村の家屋



黄河



段丘と段々畑

文化財講座 (19)

縄文時代と人々 (7)

縄文時代の家族

我が国における、高齢者の総人口比は、二〇〇五年には世界一になると予想されており、家族形態の核家族化が進んでいるなか、高齢化社会は近い将来、さらに深刻な問題となりそうである。

では、縄文時代の家族はどのようなものだったのでしょうか。いくつかの研究視点から考察が加えられていますが、ここでは、岩手県上里遺跡の住居跡内に掘り込まれた穴から検出された7体の人骨の歯についての分析を紹介します。

この7体の人骨は密着した状態で発見されており、ほぼ、同時期に埋葬されたと考えられるものです。これらの性別・年齢構成は、

35〜40歳の男、25〜35歳の女、20〜30歳の女、14〜19歳の男、10歳ほどの女一人、8歳ほどの男と推定されています。

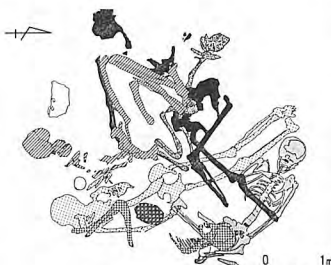
さらに、各々の歯の大きさを計測し、統計学的分析から、血縁関係の推定も行なわれています。それによると、7体の人骨は、一夫婦とその4人の子供、ならびに夫の妹からなる家族と推定されています。これは前提となる条件に、まだ、検証すべき点が残されていますが、興味深い結果であるといえます。

縄文時代の家族は、堅穴住居に住んで生活を営んでいましたが、仮に、一人当たりの居住面積を1坪、つまり、3.3平方メートルとすると、5・6人前後の小規模な集団が暮せる位の広さの住居がほとんどで、大家族が暮せるような規模の大きいものは稀です。

上里遺跡の結果もふまえて考えてみますと、縄文時代においても一般的には、

夫婦を中心とした核家族が各住居に居住していたと予想することができるでしょう。

核家族が社会において重要な役割を担っているという点では現代も縄文時代も変わりはありませんが、縄文人は狩猟や漁撈など、家族間で共同して行なう必要



上里遺跡出土人骨

のある作業が多いために、現代人以上に血縁・地縁関係が重視されていたようです。

現代の高齢化社会のかかえる問題の一つとして、世代間の断絶があるようですが、それは縄文人にとっても想像もつかないことかもしれません。(西沢 明)

巻頭写真についての情報
双蛇把手付深鉢土器

No.67 遺跡は大栗川中流域の右岸にひろがる平坦な河岸段丘上に位置しています(現在は団地に隣接した大塚公園となっています)。

昭和46年、高圧線鉄塔の建て替え工事に伴って実施された発掘調査により、縄文時代中期の大規模な集落遺跡であることが確認されました。調査は工事によって影響を受ける範囲のわずかに700㎡を発掘したにすぎませんが、縄文時代中期の集落に関する遺構・遺物が多数発見されました。遺構は堅穴住居跡、敷石住居跡、埋葬などで、時期は中期中葉から末葉にかけてのもので

す。この土器は住居跡などの遺構に伴って出土したものではなく、いわゆる「土器捨て場」に破片の状態です。捨てられていたものではなく、復元にあたっては部分的な

補修が加えられているだけです。器形は、底径よりも口径のほうがやや大きい単純な筒形の土器の口縁部に、大小一對の中空の把手を配したものです。把手にはそれぞれディフォルメされた蛇の鎌首が付きますが、蛇の頭は一方が内側を、他方が横を向いています。文様は把手の他には胴上半部に地文の縄文を眼鏡状に磨り消した文様が付くだけで、勝坂式のなかにあつては比較的装飾の乏しい土器です。

勝坂式土器の文様の一部に蛇体装飾が使われることは決して珍しいことではありませんが、多くはただちに蛇体とは認識できないまでにディフォルメされており、このようなりアルな姿をとどめるものは少ないのです。また、このようなりアルな姿をとどめながら、しかも複数の蛇体が把手に付けられた例となります。その類例はほとんどないものと思われ

(可児通宏)



講演する永塚澄子氏

映画「森と縄文人」
教育映画祭
最優秀賞受賞！

設立十周年記念映画として当センターが企画しました「森と縄文人」が、一九九一年教育映画祭、学校教育部門・高等学校教材において、見事に「教育映画祭最優秀賞・文部大臣賞」に輝きました。

映画と講演の会

7月6日(土)・7日(日)の両日、当センター会議室において、主に粘土を素材としたものの生産をテーマにした映画と講演の会を催

しました。6日は、映画

「古代史の発掘」、講演は、

調査研究員栗城譲一による

大丸窯跡群出土の瓦についての説明の後、永塚澄子氏

による「古代瓦と粘土の化学」で、140名の参加者があ

りました。永塚氏は当センター保存科学室で活躍されて

いますが、今回はその成果の一部を発表していただき

ました。7日は、映画

「うつわ―食器の文化―」

と、講演は、主任調査研究

員可児通宏による「縄文土

器の製作」と、調査研究員

及川良彦による「縄文粘土

採掘坑の調査」で、130名の

参加者がありました。

9月7日(土)・8日(日)

の両日は、同室において、

江戸をテーマとして行なわ

れました。

7日は、映画「江戸図屏

風と江戸の町」と、講演は、

早稲田大学助教授谷川章雄

先生による「江戸の考古学」

で、参加者は141名でした。

8日は、映画「絵図に偲ぶ

江戸のくらし」と、千葉大

学助教授玉井哲雄先生による「江戸の町割りと庶民の住居」でした。台風による大雨にもかかわらず、57名



石器について講演する原川調査研究員

の参加者がありました。

石器教室を初めて開催

8月20日(火)午後1時

半から石器の作り方や使い

方についての講義と石器製

作の見学を行なう石器教室

が初めて開催されました。

原川雄二調査研究員を中心

とした職員によって講義、

製作実演が行なわれました。

参加者による石器製作は危

険性があるために行いませ

んでしたが石器の模造品に

触ったりなどするため参加

者を制限せざるを得ません

でした。あらかじめ、30名

の定員で申し込みを受けま

したが108名の方々から応募

があり、抽選を行いました。



映画と講演会
講演する玉井哲雄先生

土器と対面して

No.300遺跡の土器の

整理を終えて

整理 池谷紀子

一つ一つと数えているうちに、およそ二百個の縄文土器のトレース(実測図清書)が終わりまりました。

土器に表された形、文様の施されたところを観察していると、縄文人の慣れた指先で輪積みをしてゆく姿が見えるようです。今も各家庭で使っているやかんや土瓶がこの頃の注口土器と似た形であることは、偶然の一致といっても良いのでしょうか。

食器、調理器など、今の私達に置き換えてみても、何千年もの差を感じさせません。縄文時代は心も、自然も、それなりに豊かであったから一万年もの長い間、大きな変化もなく暮らせたのかしらと思ったりしています。

尾張藩上屋敷跡遺跡
現地説明会

4月から新宿区市ヶ谷にある尾張藩上屋敷跡遺跡の調査が始まりましたが、8月3日(土)午後1時から4時まで、遺跡の現地説明会が行なわれました。

当日は暑さにもかかわらず400名の都民の方々の参加がありました。今回の見学範囲は屋敷地の東北区域に相当し、建物の礎石、排水用の石組溝、井戸、厨房などの遺構の見学を中心に行なわれました。



遺物についての説明

安全の日

「全国安全週間」が7月1日から7日までの1週間にわたって「みんなで決意



江戸の地図なども用いての説明



遺構についての説明

みんなで努力

前進させよう職場の安全」のスローガンのもとに全国の事業場で展開されました。センターでも例年のように、この週間を機会に遺跡調査現場などで働くみなさんの協力を得て、職場の安全状況を見直し、ゼロ災害をめざすため7月1日を「安全の日」として行事を行いました。

例年のように安全標語の入選作が発表されましたので、ご紹介いたします。

- 一等「慣れた作業に隠れた危険 見抜く感性ゼロ災害」 小川暢夫
- 二等「ジョレンの刃 調査の利器も油断で凶器」 雪田隆子

同 「高めよう安全意识と調査の技術 おさえよう無理な作業と事故の数」 池田久子

三等「安全旗 今日も見下す無事故の遺跡」 野崎ヒデ子

同 「軽い荷も 油断で起きる重い怪我」 堀 友子

同 「こわいのは やって
いるつもりと知っているつ
もり 安全確認 安全知識」
飯山洋子

救急法講習会

7月6日(土)にセンター会議室で職員研修の一環として、多摩消防署救急隊の協力により職員および協会の班長さん達を対象に行なわれました。前年の復習として三角布による圧迫包帯法と人工呼吸法についての講習が実技を交えながら行われました。

海外からの研究者

7月12日(金)
タイ王国のタイ考古局からソッド・ダナギェット氏(遺跡・遺物保存局長)が来所されました。

7月29日(月)

スウェーデン国立古代史博物館からサビネ・ステン氏が来所されました。動物遺体の出土例の多いスウェーデンで動物考古学を研究されています。7週間の滞在

ですが、その間に、日本の行政発掘について実際に見学したいということでNo.924遺跡の古墳時代前期集落の調査を熱心に見学していました。

研究活動への助成

今年度職員研究助成が7月24日に決定しました。グループ研究

「古代・中世における石幢の研究―浅草寺「六地藏石灯籠」(石幢)を中心に」
斉藤 進、武井利通
個人研究
「竪穴式石室の変遷―技術系統論的研究から―」
沢田秀実

「原石の変異が石器(剝片)形態に及ぼす影響」
五十嵐 彰
「甕被葬の意義」
西沢 明



発行

財団法人 東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-74-8044
平成3年9月30日